
私の人生とは...生きる意味と希望

濱口夏樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の人生とは…生きる意味と希望

【Nコード】

N3610Z

【作者名】

濱口夏樹

【あらすじ】

今世の中にはいろんな人がいます。その全ての人がコンプレックスや悩み事を抱えているものです。この小説は私の実体験です。普段人には言えないことや思っていること感じたことを書いています。当時は周りの同級生も誰も知らないことでした。今になって話せるようになりましたが…。実際今悩み事を抱えてる人はなかなか打ち明けられないものです。でも少なからず人は独りきりではないことが伝われば幸いです。上手く表現出来ないところもありますが読んでみてください。

人生の始まり…

昭和55年8月17日私は生まれてしまいました。本当は生まれましたが、でいいのだろう…でも私は今でも生まれて来たことを後悔している。

家は少し貧乏でしたが普通のどこにでもあるような家庭でした。

父がいて、母がいて、姉と弟がいる外から見れば本当に普通の家庭でした。

ただ違うのは昔の古い家庭の様な感じで、大黒柱は父で家族の誰もくちごたえは出来ませんでした。父が黒い物を指差し「これは白だ」と言えば家族全員が声を揃えて「はい、白です」と言わなければいけませんでした。

まだまだありますが、気分転換に私の幼少の頃の話でもしましうか…気分転換にならない気がします…。

私が幼稚園の頃は周りからすればどんくさい子供で、かけっこはいつもビリ、鬼ごっこではずっと鬼でした。いくら追いかけても誰も捕まえることが出来ず最終的にはよく泣いていました。鬼ごっこに關しては仲間にも入れてもらえず、あぶらごとという位置付けがほとんどでした。

あぶらごとというのは鬼ごっこに参加はしてるものの、捕まっても鬼にはならないっていうルールでそのころは笑顔で逃げていましたが、今思えば逃げる必要もなくむしる仲間外れにされていたのだと思います。それに気づいたのは小学校になるころでしたのである意味良かったのかも知れない。

ただその頃から自分の鈍さに嫌気があつたのは間違いありません。そこである日、自分が変わるように父にランニングがしたいと言ってみたのが全ての始まりだったのです。

父は馬拉ソンをしていました。足がものすごく早く感じていたのでその部分は懂れていました。私が走りたいと言った時、父は「ま

だ小さいからなあ…」といいながら嬉しそうでした。でもそれから地獄の様な日々が待っていたことは私にはわからなかったのです。それから雨の日も風の日も雪の日も台風の日でさえも毎日決められたコースを走らなければならなくなりました。私には父を含め家族から信用してはもらえてなかったので、毎日走った証拠としてコースの一番遠い所にあるマツボックリを拾ってかえらなければなりませんでした。それも幼稚園から帰ってきて父が帰ってくるまでに走っていないと拳で殴られ普段よりも遠い所に走らされていました。最初は少し走れるようになればと軽く思っていたのに、いつの間にか強制的に走らされていたのです。

小学校になって少しずつ家庭環境がわかりだした時から毎日が恐怖でした。

食事の時はテレビを見るのが禁止だったのですが、もちろん父はテレビを見ながら食べてます。ほとんどニュースでしたが時々笑い声が聞こえるのでふと見てしまったりすると、振り返った時には茶碗が顔に飛んできて、「メシがいんのやろ、一週間メシ食うな」と言われ食べてた途中のご飯も捨てられました。まだ一週間ならよくあることで平気なんです、さすがに1ヶ月の時は死ぬかと思いました。いや…その時、心は死んでしまい身体だけが残ってしまったのかも…。

いつも些細なことでも何かあるごとに殴る蹴るは当たり前。家を追い出され、遠くに走らされ（もちろん毎日のコースは走った上に別のコースを走るんですけど…）毎日家に居る時は息を殺し存在感を消す努力をしなければなりませんでした。

でもやっぱり男の子でしたので、家で走ったり、跳ねたりしてしまいうんですけど、そのたび必ず苦痛が待っていたのです。

毎日父の顔をうかがいながらの生活は生きてる意味さえわからなくならせる程でした。唯一楽しめたのは学校に行くことでした。もちろん勉強は大嫌いでしたが毎日給食があつてご飯が食べられるのでそのためだけに学校に通っていたんです。学校がある日はご飯抜

きでも1日一食は食べられたのです。でも夏休みなど長い休みになると大変でその間はご飯抜きになると本当に食べる物がありません。まず草を食べてみましたがものすごく苦くて無理だっと思って、どうしたらこの空腹感を消すことが出来るのかと考えました。一番最初にしたのが、お腹が空いたと思うからダメなんだと思い自分はお腹空いてないって思い込ませました。その次はいつ何時その様なことになってもいいように台所から砂糖を少し袋に入れて隠しもっていました。食べる頃には角砂糖のように固まっていました。指につけて舐めて忘れることが出来なかった。空腹感を消していました。夏場は川に入って魚を捕り竹に差し、河原で焼いて食べたりもしました。ある意味その時に気合いと根性が付いたのかもしれない。曲がっていますけど。

生きてることに対する失望

私は小学校に入り苦痛の三年の月日がながれた。小学三年にもなると子供ながらにいろんなことを思い、考え、また大人じみてくるころでもある。周りのみんなはテレビ番組の話しに盛り上がり幽霊の話しに怖がっていた時期でもある。学校のトイレに出るらしいと言えみんなトイレに行くのを怖がったものだ。でも私は全然怖いと感じたことはない。幽霊よりも怖い父がいて、一晚中放り出されることもよくあったので暗いにも孤独にも慣れてしまってたのだ。子供ながらに考え、もし幽霊がいるなら友達になろうとか思ってた時もあったがやはり幽霊はいないという結論をだしたのもそのころのことだ。

毎日生きること必死で怖いとか怖くないとか考える時間もなかったのも一つの理由だ。それよりも自分が隣りの家に生まれてきたら良かったのとか、どうして生まれてきたのか、生きて行く自信がないのは自分のせいだ、などをずっと毎日考えていたものだ。毎日考えても答えは見つかることはなかったただ自分に対する失望、生きてることに失望、それだけが頭に残っていくだけだった。

今日を生き抜く為に自分の中に3人の自分がいるのにも違和感がなくなり出したのにも精神的には大きな負担になって来ていたのもこの頃だったのだろう。

1人は家の中の自分、もう1人は友達という時の自分、最後の1人は独りきりになった時の自分。世間的には内と外の使い分けで片付いてしまうことだろう。でも余りに極端に使い分けるには子供には負担があり過ぎることで凄く精神的に疲れていました。

自分のことや人が生きている意味、家族環境のことを考える時は決まってマンションの屋上でした。三階建てのマンションの屋上に上がり、屋上の端に足をぶらぶらさせ道を走る車や歩いてる人を見ながら考えるのが一番でした。

小学校3年生のある日、ふと思いました。自分がこの世の中から居なくなれば家族が喜ぶだろう…。自分はこの世の中に必要ない…。死のう。

小学3年生が考えることには余りに突発的だと思われるかもしれませんが。でもその時は広い視野も持ち合わせていませんのでそこにたどり着いてしまったのです。

「よし、今この屋上から飛び降りよう。そしたら全てが終わる。今の苦痛も終わる。家族は喜ぶ。」いつの間にか遠くを見て声に出していました。

自分サヨナラ…。そう思い、屋上の端で座ってたそのままの状態を下に向かって落ちていった。

「痛ったあ…。て、生きてる…。運が良かったのが悪かったのか下は砂場でキレイに足から着地していました。もちろん無傷ではなく膝が剥離骨折したのですが…。親にも言えずパンパンに腫れた足を引きずりながら家に帰り次の日から痛いのを我慢しながら学校に行き、痛いのを我慢しながら走っていました。何故死ねない…。死なせてほしいのに…。最初で最後のワガママだったのに…。

その後トラックに飛び込んでみたけど足が折れただけだった。

もちろん交通事故として警察が来て父にも死ぬぐらい怒られ殴られ病院送りになりました。

まだ終わらないのか…。どうすればこの苦痛の毎日から逃れる方法はその時には万策が尽きてしまいました。

新しい生活と友達。そして自分の成長

二部まで読んでいただきありがとうございます。

3部目からは小学生の自分に戻ったつもりで書きます。辛いことも沢山ありましたが楽しいこともありしたのでじっくり書いていきますので宜しくお願いします。

今小学生3年生の夏休みに入りました。楽しいけど辛い辛い夏休みです。夏休みのある日に夏樹は普段とは何か違うことに感じた。
「おはよう…ってもう昼かあ…あれ？お母さん今日はなんで家族みんないるの？」

「夏樹おはよう。実はこの夏休みの間に引っ越しするんだよ」

「へえ、誰が引っ越しするん」

「うちの家族よ」

笑顔で答えるお母さんをじっと見ながら考えてみた。家族って僕もかな…。

「お母さん、どこに引っ越しするん？」

「少し離れた団地だよ。夏樹はまだ行ったことないけど良いところよ。小学校変わる手続きもしてあるからね」

「え…」

せっかくランニングの成果も出てきて仲間外れもなくなってきたのに…家族は引っ越しでワクワクしているけど夏樹はそんな気分にはなれなかった。それよりも新しい小学校に馴染めるか不安でいっぱいだった。

夏休みも引っ越しでバタバタしてあっという間に終わった。最後に今まで居た家を出る時にお母さんはなんか寂しいって言ってたけど夏樹は全然寂しいって思わなかった。だって辛いことしかなかったし。でも友達とさよならは寂しいな…。

引っ越し先は10キロ離れた山に囲まれた団地で小学生の夏樹には

すごく遠くの田舎に来た感じがした。

夏休みも終わり新学期が始まり新しい小学校の生活が始まった。顔色を見ながら行動するのもあったしお調子者でもあったのですが友達が出来た。でも学校の中だけの友達です。早く家に帰って走らないといけないので学校が終わって遊ぶ時間は夏樹にはありませんでした。しかもみんなはバスで通学していたのに夏樹は1時間かけて歩いて登校していたので早く帰らなければなりませんでした。最初は歩いて通学していることをバカにされたがだんだんと帰り道と一緒に歩いて帰ってくれる友達が出来た。その時ふと友達に誕生日を聞かれた。

「夏樹は誕生日はいつなん」

その時夏樹は誕生日が過ぎていたのに気付いた。

「あ、8月17日だよ！もう終わってるけど…」

夏樹の家では誕生日を祝うことも正月もお盆もクリスマスもなかったのだ。そのため誕生日も気がつかないけどもあった。みんながイベントを楽しんでいるのが羨ましかった。誕生日にプレゼントを買ってもらったこともないのが寂しかった。

学校の友達とは仲良くなって家のすぐ目の前に同級生がいることがわかった。学校から帰ってから少しの時間だけ遊ぶようになった。空き地で火遊びして草を燃やしたり、ゴルフをしたりした。雨の日はゲームもした。ただ夏樹の家ではゲームもマンガもアニメも禁止だったので羨ましくて仕方ありませんでした。お父さんが口癖のように頭が悪くなるから禁止だと言ったがそんなことしなくても僕はバカだよと夏樹はいつも思っていた。ゲームは苦手だったが家の前の友達「さとり」はゲームが出来なくても仲良くしてくれたのが夏樹にとって本当に嬉しかった。

学校では一輪車と卓球が流行っていたので夏樹は友達に溶け込むため一輪車を乗り始めた。一生懸命していると自然とみんなが教えてくれた。

学校の友達には少しずつ溶け込むことが出来たのだが夏樹は家に

は馴染めなかった。相変わらず殴られ蹴られ走らされての毎日だったからだ。いつもお母さんが止めに来ていたがそのお母さんにお父さんは子供の育て方が悪いとお母さんも殴っていた。ある日そんなお母さんに夏樹は言いました。

「止めに来るとお母さんにも暴力振るから止めに入らなくて大丈夫だよ。僕にはお父さんがすぐに止まる方法があるんだよ」

「え、それはどんな方法なの」

夏樹は簡単に説明した。殴られるときには顔を出して全身の力を抜くという方法で鼻血か口が切れて血がたくさん出るようにする方法だった。しかも鼻血が出なくても全身の力を抜いていて吹っ飛んだ先で頭をぶつけると血が出るからと。お父さんは血が苦手だったから血を見ると殴るのを止めて外に放り出すのが決まりだったのだ。殴られるより夏は蚊と戦い、冬は寒さを耐えしのぐ方が夏樹には楽だったのだ。この説明をするとお母さんは涙を流しながらかすかな声で謝っていた。

「ごめんね…ごめんね…」

孤独、孤立、自分との戦い

夏樹はお母さんの気持ちが少しだけわかっていた。常に実家に逃げる準備をしていたのを知っていたからだ。ただその時は泣いているお母さんに「大丈夫」とそれしか言えなかった。

一年はあつという間に過ぎた。毎日生きること必死で食べる物が無いときは川にいつて魚を焼いて食べていた。毎日走り、毎日痛みに耐えた。お父さんは何かと理由を見つけては腹筋100回を命じてきた。まだ100回ならいいが動きが遅いとさらに100回追加されたりもしたから死ぬ気で腹筋をした。頭を振りすぎてフラフラしても吐いてもしなければならなかった。夏樹はそれでも笑顔で頑張った。もし泣いていたらお父さんに必ず「笑え」と笑うことを強要されていたのでいつも涙を流しながらでも笑顔でいたのだ。だが腹筋なら家族に飛び火することがなかったから泣くことはなく笑顔でいられた。

ある日ケーキを食べることになった。祝い事ではなかったがお父さんが食べたかったらしい。ホールケーキを家族で食べることはホントになかったので箱を開けた時に夏樹は思わず覗き込んだ。

「うわぁ！美味しそう」

その瞬間、顔に激痛が走った。何があつたのかわからないまま起き上がって見るとお父さんが凄じい剣幕で怒鳴ってきた。

「お前の汚い唾が入るやろ。何をはしゃいどんな。もうお前は食うな。」

ああ、またやってしまったと思いつながらお父さんに土下座して家の外に出された。子供のようにはしゃいではダメだと夏樹は頭ではわかってはいたがやはり子供の部分を完全に消すことが出来なかったのだ。無心でいること、空気存在でいること、自分は家族ではないと夏樹は自分に言い聞かせながら寒い夜空の星を眺めていた。

翌朝まだ夜も明けきれない時間、夏樹は寒さに震えながら外にい

た。外に出された時は必ずお父さんが仕事に行くまで家には入れなかった。この日はいつもより寒くて手も足も感覚がなくなっていた。意識がもうろうとしているのは眠気からなのか寒さからなのかわからないまま意識を失うように眠った。

「大丈夫か？」

急に声を掛けられびっくりしたが身体が動かない。そつと上を見上げると警察官が立っていた。夏樹は夢でも見てるのかと不思議な顔をしながら答えた。

「大丈夫」

いつものように笑顔を必死で作って警察官を見上げた。その後意識が遠くなつてうずくまったまま眠っていた。

意識が戻ったのかただ眠っていたのかわからないまま目を覚ました。布団のなかで寝ていることに気付いて昨日のことが夢だったのかと考えてみたが手足が痛かったから夢ではないことがわかった。でもいつ布団に入ったのかわからないのでお母さんに聞いてみた。

「お母さんおはよう。僕布団で寝てたんやけどいつ布団に入ったん？あと警察官がいたような気がしたけど夢ではないよね？」

お母さんは今朝あったことを静かに夏樹に話した。今朝新聞配達している人が夏樹を見つけて声を掛けたが返事がなかったため警察を呼んだこと。警察が来て親を起こし何があつたか聞いたこと。その時寒さで震える夏樹を早く温めるように言われて布団に連れて行ったこと。警察は病院に行くように言っていたがお父さんが大丈夫だと断ったこと。夏樹はただうなずきながら聞いていた。警察官に助けられたのは嬉しいけどお父さんが仕事から帰ってきたら何を言われるか心配だったのだ。その日は学校を休んで家でいたが生きた心地はしなかった。夕方お父さんが帰ってきた時が裁きの時間だとわかっていたのだ。夏樹はよく考えてた。自分はお父さんに嫌われてる、なぜ生まれてきたのか、本当に家族なのか、いつか殺される。夏樹は一生懸命考えてみたが答えが出ることはなかった。

その夜案の定お父さんに怒鳴られ外に出された。もちろん裏口に。

昨日のことで裏口なら誰もわからないということをお父さんは学んだのだろう。そう思いながら屋根の隙間から見える星を眺めた。今日は大丈夫。夏樹は自分に言い聞かせた。夏樹は昨日はシャツ一枚だったのだが今日はトレーナーを着てたのだ。早く朝になれば、と唱えながら小さくうずくまって眠った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3610z/>

私の人生とは...生きる意味と希望

2011年12月19日21時48分発行